様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０２４９

研究課題名（和文）形式と意味のインターフェース研究―日英語の比較構文に焦点をあてて

研究課題名（英文）A study of the interface between form and meaning: with special reference to comparative constructions in Japanese and English

研究代表者
吉本　真由美（Yoshimoto, Mayumi）

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：６０５８０６６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語と英語の節比較構文を取り上げ、統語と意味の接点を探ることを目標とした。特に、subcomparativesと呼ばれる節比較構文と通常の節比較構文の言語データを中心に観察し、これらの比較節内の構造が異なっていることと、前者の構文の意味解釈にはイベントの測量が関わっていることを指摘した。そして、ここで提案される統語構造と意味表示に基づいて、これら2種類の節比較構文が容認される条件を考察した。

研究成果の概要（英文）：This research aims at exploring the syntax-semantics interface, investigating subcomparatives and (ordinary) clausal comparatives in Japanese and English. As a result, it has been found that these constructions have different structures, and that the interpretation of the former type of construction is related with event measurement. This study has also shown the acceptability condition of these two types of clausal comparatives, based on their syntactic structures and semantic representations.

研究分野：統語論・意味論

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：比較構文　統語論　イベント意味論　空演算子移動　段階形容詞

１．研究開始当初の背景

本研究は、節比較構文（Clausal Comparatives）に焦点をあて、統語構造と意味解釈との関わりについて分析した。節比較構文とは、than や as に、（句ではなく）節が後続する構文であり、下位分類として 2 種類の構文が存在する。

(i)a.‘Ordinary’ Clausal Comparatives (OC)
　John invited more men than Bill invited.
　b. Subcomparatives (SC)
　John invited more men than Bill invited women.

(ia)のように、通常の節比較構文では、than/as 以降は義務的に何らかの要素が欠けている（省略されている）が、(ib)のように、完全文が生じる節比較構文がある。後者は Subcomparatives (SC)と呼ばれ、通常の節比較構文（ここでは OC）と区別される。

英語の比較構文は、近年活発に分析が進められているが、どのように文が派生し、どのような統語構造を持つのか、また、どのようなプロセスで文の意味が計算される（解釈される）のか、といった問いについて、様々な見解が存在し、完全な解答は得られていなかった。このため、先行研究のさらなる検証と新たな仮説立てが必要であった。

さらに、英語だけでなく日本語の OC・SC も観察すると、日本語の比較構文に対する従来の見解とは異なった、興味深い事実が見出された。これまで、日本語には SC の例が存在しないとされてきたが、用いる語句や文脈によっては日本語の SC も容認されることがわかった。ただし、OC と SC では文が許容される容認性の範囲が異なり、SC の方が OC よりも許容される範囲が狭いようであった。このため、日本語についても OC、SC の例文データを精査し、これらの容認性の差が何に起因するのかを明らかにする必要があると考えられた。

２．研究の目的

１に記したような研究背景をふまえ、本研究は、以下の 2 つの目標を立て、日英語の OC、SC の統語的・意味的分析を行った。

(1) 日本語と英語の OC と SC の統語的派生プロセス（いかにこれらの文が生成されるか）と意味解釈プロセス（いかに意味解釈が行われるか）を解き明かす。その際、生成される統語構造から、構成的に計算される意味表示を提示し、統語と意味の接点を探る。

(2) (1)で考察した統語構造や意味解釈に基づき、OC と SC の容認性条件を探る（特に、SC の容認性がなぜ低いのか、その原因を探る）。

３．研究の方法

(1)　調査
大規模コーパスや先行研究を用いて、節比較構文の例文データを観察した。また、適宜インフォーマント調査も行い、統語テストや文の容認性などの確認を行った。

(2)　仮説の構築
統語的アプローチとしては、本研究を始める前に立てていた仮説を支持し、それを実証する形で研究を行った。意味論的アプローチとしては、Kennedy (1999)で提案されている測量関数分析を採用し、OC と SC の意味解釈プロセスを分析した。

４．研究成果

(1) 英語の節比較構文の統語構造について
OC, SC は、１の(ia-b)で見たように、一見すると表層上のみが異なっているように見えるが、文例を観察すると、異なった統語的特徴が見出される。こういった事実に対して、多くの先行研究では、than に後続する節（以下、これを比較節と呼ぶ）に、顕在的な空演算子移動が起こっているか否かという観点から、両者の統語的相違点が分析されてきた。だが、このような分析にも問題点があることから、筆者は、OC と SC 両方に空演算子移動が認められることを指摘し、これらの統語的相違点は、移動要素の占める統語的位置に由来するものであると提案した。具体的には、(ia)のような OC では、比較節内の目的語の位置から、空演算子が CP 指定部に移動し、一方で、(ib)のような SC では、比較節内にあると仮定される Degree Phrase (以下 DegP)のみが CP 指定部に移動すると提案した。この DegP が、目的語 DP の中から移動するとすれば、それは Left Branch Condition (LBC)に違反するものであるが、本研究では、(ib)のような SC における DegP が、目的語 DP（ここでは women として現れている）の内部構造に存在するのではなく、VP 付加の位置に存在し、そこから移動している、と考えた。SC に対して演算子移動を認めた場合、LBC の問題が発生するが、この分析では、この問題が生じない。また、VP 付加の位置から移動する、という提案は、SC の DegP が副詞的な役割を果たす事実からも裏付けられている。

(2) 英語の節比較構文の意味解釈について
意味解釈分析としては、Kennedy (1999)の提案する「測量関数分析」に修正を加えることで、OC と SC の解釈方法を検討した。「測量

関数分析」とは、スケール（「程度」や「度合い」（degree）の集合）を意味に含む、段階形容詞等を含む文において、あるものがどの程度その「度合い」を持つかを測定するものとして、スケールに写像する関数（測量関数、measure function）を仮定する分析である。この測量関数を用いた節比較構文分析では、主節に存在する段階形容詞と比較節に非顕在的に存在する段階形容詞が、それぞれの節で「度合い」を出し、その程度差が、-er などの比較形態素によって比較されるという構造が示される。本研究では、このような測量関数分析の利点を確認し、OC と SC の統語的特徴と意味的特徴を考察した上で、SC では「個体」に写像するのではなく動詞句の示す「イベント」に写像すると提案した。これにより、先述したような、(DegP が VP 付加位置に生起する）統語構造に即した意味解釈プロセスを構築することが可能となった。

(3) 日本語における節比較構文について

日本語の節比較構文については、英語よりもさらに分析が多岐にわたる。

(ii)a. 太郎は花子が招待したよりも多くの男性を招待した。

b. 太郎は花子が女性を招待したよりも多くの男性を招待した。

多くの先行研究では、日本語の節比較構文における比較節は、外見では「節」の構造を成しているが、実際は「節」ではなく「名詞句」である、とされている。本研究では、様々な節比較構文の統語的特徴と意味的特徴を観察することにより、日本語の比較節は「名詞句」ではなく英語と同様に「節」構造を成していると考え、日本語の比較節でも比較の「度合い」を返す関数が存在すること、すなわち、非顕在的な段階形容詞が存在することを提案した。

また、先行研究によると、日本語では SC が認められないとされている。その理由のひとつとして、例えば以下のような例文が認められないことが挙げられる。

(iii)a. #太郎は花子が傘を買ったより長い杖を買った。

b. #この棚はあのドアが広いより（背が）高い。

たしかに(iiib)のように、叙述用法を用いた SC は日本語では不可能であるが、(iiia)のような構造の文を考えると、容認される日本語 SC の例は多くある。

(iv)a. 太郎は花子が小説を書いたよりも長い論文を書いた。

b. 太郎は花子が一軒家を買ったより高いマンションを買った。

このように、用いる形容詞や動詞句の部分を変えると容認度合いが上がる。また、(iib)のように、「多くの」や「たくさんの」という語を用いて数量を比較する SC では、ほぼ完全に容認される。こういったことから、日本語の SC が容認されないということは（SC の定義を、「比較節内に完全文を含む」とする限りは）一概に言えないことがわかる。

さらに用例を観察すると、SC の容認性には DegP と動詞句の意味的な結びつきが関わることがわかった。一方で、OC の容認性には DegP と動詞句の結びつきは関わらないようであった。この事実から、本研究では、日本語の比較節でも、英語と同様の移動現象が起こっているのではないか、という可能性を探った。つまり、(iia)のような OC では DegP が目的語位置に基底生成され、その位置から CP 指定部に顕在的に移動する一方、(iib)のような SC では DegP が副詞の生起する位置に基底生成され、その位置から CP 指定部に顕在的に移動するという可能性である。このような提案が妥当であるかどうか、統語テストなどを通した実証がさらに必要であるが、この統語構造に基づき、このような派生に従った意味解釈を構築することで、(以下、(4)に概略を述べる通り、）日本語の OC と SC の容認性条件に対して説明が可能となると考えられる。

(4) 節比較構文の容認性条件について

(3)に示すような統語構造を基にし、また、日本語の段階形容詞にも測量関数分析を適用させると、日本語においても、OC では比較節内の DegP が名詞句を修飾し、個体を測量すること、また、SC では DegP が副詞として動詞句を修飾する機能をもち、イベントを測量することが考えられる。

だが一方で、主節においては、表層構造に現れている通り、DegP が名詞句を修飾し、個体に写像して、「度合い」が決定される。すなわち、主節と比較節の間で比較される「度合い」は、一方は副詞由来の「度合い」、もう一方は形容詞由来の「度合い」となり、比較される対象にミスマッチが生じる。本研究では、このミスマッチが SC に様々な容認性が生じる理由を解く鍵であると考え、容認性条件を提案した。それは（インフォーマルに書くと）概略以下のような内容である。

(v)SC の容認性条件

比較節内でイベントを測量することで決定される「度合い」が，主節のように個体を測量する「度合い」として解釈できる場合に、SC が容認される。

言い換えると、比較節の副詞が主節の形容詞と同じ意味でパラフレーズできる場合に SC が容認される、と考えられる。SC の文を作例し観察すると、実際にこのパラフレーズの可能性が、容認性と深く関わっていることがわ

かった。
　パラフレーズが可能かどうかということと、SC の容認可能性との間にはどのような関係があり、なぜパラフレーズできない場合には容認不可となるか、という疑問が生じるが、これについては、スケールの ’dimension’ という概念と、’incommensurability’（Kennedy (1999)）という、比較構文にかかわる現象を用いて説明をした。

(5) 結論と今後の展望
　本研究は、英語と日本語における節比較構文の統語と意味に対して、統一的なアプローチで分析することを試みた。比較構文に現れる形容詞の意味特徴を手掛かりに、比較節内に DegP が生起する位置が、OC と SC とで異なるということを提案し、この統語構造をもとに、どのように意味が計算されていくかを分析した。これにより、統語構造から構成的に解釈するような意味表示を提示するとともに、SC と OC に見られる容認性の違いを説明した。
　残る課題としては、本研究では SC の比較節内の測量関数が動詞句の示すイベントに写像すると仮定したが、VP がイベントを表さないような SC も存在するため、こういった例についてはさらに分析が必要である、ということがまず挙げられる。また、本研究は節比較構文に対象を絞ったが、比較構文には、than の補部（日本語では「より」の補部）に「節」ではなく「句」が現れる、句比較構文（Phrasal Comparatives）も存在する。これについては、節比較構文の省略形という見方もあるが、節比較構文とは異なった統語的特徴も見られるため、「節」由来ではないと考えることもできる。比較構文をより網羅的に捉えるために、他のタイプについても研究を進めたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①Mayumi Yoshimoto “A Note on Clausal Comparatives in Japanese,” *Osaka University Papers in English Linguistics* Volume 16, 査読無, 2013, 207-222.

〔学会発表〕（計１件）
①吉本真由美「日英語の節比較構文における統語と意味」阪大英文学会第 41 回大会，大阪大学，2012 年 10 月 20 日.

〔図書〕（計１件）
①吉本真由美「日本語における節比較構文の容認可能性条件について」『言葉のしんそう（深層・真相）―大庭幸男教授退職記念論文集』印刷中，頁数未定，英宝社.

〔その他〕
① Mayumi Yoshimoto ”The Syntax and Semantics of Clausal Comparative Constructions,” 博士論文，大阪大学，2012.

６．研究組織
(1)研究代表者
吉本 真由美（YOSHIMOTO, Mayumi）
大阪大学大学院・文学研究科・招へい研究員
研究者番号：60580660